

『いちじくの木を呪う』

聖書 マタイによる福音書 21 章 18～22 節 讃美歌 355 521

説教 森田幸男牧師

今日の箇所の小見出しは、“いちじくの木を呪う”となっております。これは聖書の本文ではありません。新共同訳をした人が読者の便宜のために「この段落で書かれていることはこういうことです」というので、親切で付けてくれた題であります。『いちじくの木を呪う』という言葉自体は、今日の箇所にはありません。この小見出しの下に、(マコ 11: 12～14、20～24)と参照箇所が出ております。そのマルコによる福音書の 11 章(84 頁)の方を見ますと、12 節以下に“いちじくの木を呪う”と小見出しはおなじです。内容はマタイによる福音書と余り変わりませんが、イエス様の言葉が少し違います。「今から後いつまでも、お前から実を食べる者がないように」となっておりまして、これは、「今から後いつまでも、お前には実がならないように」と、同じようなことが出ています。そしてこの段落にも「呪う」という言葉はありません。マタイ福音書の方には、「たちまち枯れてしまった」となっているのですが、マルコによる福音書の方では、弟子たちはイエス様のおっしゃることを聞いていたわけです。その次に“神殿から商人を追い出す”という箇所がマルコ伝の方にはあるのです。マタイ伝の方では、“神殿から商人を追い出す”というのは今日の箇所の前にあります。そしてマルコ伝の方の流れを見ますと、神殿から商人を追い出して、そしてベタニヤ村に出て行かれ、翌朝そのいちじくの木の前へ来たら、11 章 20 節、「翌朝早く、一行は通りがかりに、あのいちじくの木が根元から枯れているのを見た。そこで、ペトロは思い出してイエスに言った。『先生、御覧ください。あなたが呪われたいちじくの木が、枯れています。』」とあって、ここで初めて「呪われた」という言葉が出てきますが、これはペトロの言葉です。それなら、イエス様はこのいちじくの木を呪われなかったのかと言うと、勿論呪われたのです。それで、私たちは今日の箇所を素直に読むと、どうしてイエス様はこのいちじくの木に、「今から後いつまでも、お前には実がならないように」と、このようにおっしゃったのだろうかという疑問が湧くと思います。

「いちじくの木」ですけれども、旧約聖書のミカ書 4 章 4 節とか、ゼカリヤ書 3 章 10 節などを見ますと、いちじくの木の下で憩うことは平和と繁栄の徴、神の祝福の徴であることが分かります。しかし今イエス様がイスラエルの状態を見られる時、それは神の祝福を受けた状態とはとても言えず、むしろそれとは逆の状態であると見られたのです。そうすることで、私たちが前回読んだ神殿から商人を追い出す、いわゆる「宮清め」ということをイエス様がなさったのを読みました。そして私たちは今日のマタイによる福音書 21 章 18 節以下へと来るわけでありまして。これは過越祭の頃でありますから、今頃の時期でありましょう。いちじくは年に二回実をならせませす。それで春の今頃、最初の実をつけて、そしてまた秋に実を付けるのですが、イエス様がベタニアからまたエルサレムに戻って来られて、その途中空腹を覚えられた。すると道端にいちじくの木があるのをご覧になって近寄られたが、葉のほかは何もなかった。だから葉は新緑でその木陰に憩うことができるということですが、葉ばかりで実は何も無かったということでありまして。そこでイエス様は、「今から後、お前にはいつまでも実がならないように」と言われますと、いちじくの木

はたちまち枯れてしまったとあります。マルコによる福音書の方では「翌日、根元から枯れていた」となっています。

イエス様はこのいちじくの木、葉が繁っていて、春ならば新緑で目に鮮やかであったのでしょうかけれども、その華やかさの中に何の実もない実質もないばかりか、根元から枯れたというのですから、何か腐っていた。そしてこれは前回読んだ神殿の腐敗墮落、イスラエルの国の腐敗墮落と重なって、最後の華やかさのようなものをご覧になったのではないのでしょうか。過越祭には何百万という人が集って来る。そしてこの前ちょっと試算しましたが、何十億、何百億という献げ物を介して神殿当局が不正な利益を得ていた。そして、イエス様は、「この神殿はすべての人の祈りの家であるべきなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしてしまっている」と、このように言われたことが書かれていました。ですからその表面の華やかさ、賑やかさとは反対に、中身は何もないばかりか腐敗と墮落、不義、不正、利権が横行している。そういう姿をイエス様は見られて、このエルサレムの状態と、この実のないいちじくの木が重なったのではないのでしょうか。

それにしても私たちは、いちじくの木に罪はないのではないかという思いは避けがたいのであります。けれども今日の箇所ばかりではなく、このマタイによる福音書全体を見ますと、こういうことも私たちは既に読んできているわけです。例えば「山上の説教」のマタイによる福音書7章の15節以下にはこうありました。「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとしてあなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である。」預言者は神様の言葉を預かって、そしてそれはどういう内容であれ神様が「語れ」と言われたとおりに語る。たとえ自分の身に不利益が生じることがあっても、時には命が取られるということもあるわけですが、そうであってもその言葉を語るといのが預言者でありました。ところが、預言者のふうをしながら、狼のような偽預言者もあるということなのです。

7章16節、「あなたがたは、その実で彼らを見分ける。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるだろうか。すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともできない。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。このように、あなたがたはその実で彼らを見分ける。」このように既に言われておりました。「良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる」というこの表現の方が、今日の、「今から後いつまでも、お前に実がならないように」という表現よりも、もっと厳しいのではないのでしょうか。

また、今日の箇所は21章の18節以下ですが、少し先の23章の37節以下には、“エルサレムのために嘆く”となっております。「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる。」このようにあります。そして24章の方へ行きますと、「イエスが神殿の境内を出て行かれると、弟子たちが近寄って来て、イエスに神殿の建物を指さした。そこで、イエスは言われた。『これらすべての物を見ないのか。はっきり言うておく。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。』」こう言われて、神殿の崩壊を予告されたことが記されております。

「弟子たちが神殿の建物を指さした」とあるのですが、マルコによる福音書13章の1～2節には同じことですがこのようになっていきます(88頁)。「イエスが神殿の境内を出て行かれるとき、弟子の一人が言った。『先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。』」イエスは言われた。『これらの大きな建物を見ているのか。一つの

石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。』」このように、イスラエルが見捨てられて崩壊し、荒れ果てるということが断言されているのであります。今日のいちじくの木に「今から後いつまでも、お前には実がならないように」と言われたことで、“イエス様はこういう厳しいひどいことを言われるのか”と私たちは疑問を持ちますけれども、今マタイによる福音書に限って少し見ただけでも、イエス様の厳しい言葉はこれだけではないわけです。

そしてもう一度今日の箇所へ戻ります。聖書のその箇所で、イエス様が言っておられること、為しておられることの本当の意味を掴むのは、難しいとわたしは今回も思いました。今日の箇所で特に注意したいのは21節以下で、このようにあります。「イエスはお答えになった。『はっきり(アーメンという言葉)言うておく。あなたがたも信仰を持ち、疑わないなら、いちじくの木に起こったようなことができるばかりでなく、この山に向かい、<立ち上がって、海に飛び込め>と言っても、そのとおりになる。信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。』」

私は今日の説教の草稿で、パソコンで字を太くして、アンダーラインを引いて、字を斜めにした箇所があるのですが、どこをしたかと言うと、「この山に向かい」というところです。これまでも注目しないことはなかったのですが、「この山」と言われるのですから、これはイエス様と弟子たちがその時見ている山ですね。漠然と「山」と言っておられるのではないわけです。私も前に言いましたが、「山」というのは普通は動かない物の譬えですね。それでも本当に信じて疑わないで祈り求めるならば動かないものでも動く。そういう祈りのこととして私も語ったことがあります。そういう一面もなくはないでしょうけれども、そうすると「この山」ではなくなるんですね。今日の箇所からその言葉だけ取り出して、祈りのこととして抽象化してしまっているわけですが、ここで「この山」というのは、どの山かということなんです。今、イエス様と弟子たちは、朝早くエルサレム郊外のベタニヤ村を出てエルサレムに向っておられるわけです。その途中にいちじくの木があった。一向はエルサレムを目指して、それを見ておられるのです。そして、「この山」と言われました。それはシオンの丘、エルサレムが立っている丘全体であります。この山に向かい、「立ち上がって海に飛び込め」と言っても、そのとおりになるとイエス様は言っておられるのです。いちじくの木一本や二本ではないのです。その山全体が海に落ちて滅びるのです。

私たちは木を大事にするということはそれなりに必要なことですが、少し甘いヒューマニズムを木にまで及ぼして、木に罪はないのだからという感じを持つのですが、ここは木どころではない、その山全体、そして弟子たちがそのすばらしさに驚いているその神殿、それもこれも含めてその全体が海に落ちて崩壊してしまうことを、あなたがたが信仰を持って、本当に疑わないでそれを求めるならば、そのとおりになる。そして、信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。すべてそのようになるのだと、このように言っておられるわけです。

これを、今日の箇所から取り出して、「信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる」とあるが、そうしたけれども得られなかったという話はよく聞かれます。ここで言われているのは、そういう話ではなくて、見た目には華やかで賑やかで、いかにも立派そうに見えるけれども、何の内実もないどころか、むしろ祈りの家を強盗の巣にしているようなその全体が、滅ぼされて一新される必要がある。イエス様の思いはそちらにあるわけでありまして、ですから私たちもこれまで聞き損ねてきたかもしれません。

こういうことを聞かれたあと、弟子たちが神殿を指差して、「何とすばらしい石でしょう」

と言ったということが24章とマルコによる福音書13章1節にありました。ということは、イエス様がここで語られたことを、弟子たちも聞き損ねたということではないでしょうか。ですからここでは先ずいちじくの木一本ですけれども、私たちの足元の小さな、或いは自分の中にある偽り、偽善、そういうものを先ず改めていく。イエス様の呪いの言葉は、マタイによる福音書23章にいくと、例えば15節、「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ」とこのように言われています。これをイエス様は何回も言われます。前の口語訳ですと、「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたはわざわざいである」となっています。この「わざわざ」というのは、「嘆き」と「怒り」と「呪い」を含んだ言葉です。ですから、イエス様が怒らないとか呪わないとか、そんなことはないのです。ですから、「もう実がならないように」「あなたの木からもう実を食べる人がないように」もう実をつけてはだめだと、こういうことを言っておられるのです。何故なら、それは偽善の実、悪の実、腐敗の実、墮落の実ですから、そんなものはならない方がいい。食べない方がいいというわけですね。それを生み出す全体としてのエルサレムが海に没して壊滅することを祈り求めなさいと言っておられるのが、イエス様の真意ではないでしょうか。

「はっきり言っておく。あなたがたも信仰を持ち、疑わないならば」信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる」とあります。21章13節には、「わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである」とあります。このように言われたとき、この「祈り」というのは、本当に神様のなさってくださった事に対する感謝と、そしてその神様の御心が本当に成る事を祈り求めることではないでしょうか。ところが、表面的には祈りはなされていても、その行為の実質は強盗行為だとイエス様はエルサレムに対しておっしゃっているわけです。

そうしますと私たちも今日の箇所を読んでいて、いろんなことを捨象し、抽象化して、「信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる」という言葉だけを取り出してなす祈りというのは、それこそご利己的な祈りになってしまうのではないのでしょうか。そういうことではなくて、先ず足元の偽りを改める。それを根絶やしにすることから始めて、そして社会全体、国全体といってもいいですし、世界全体と言ってもいいですが、そこにある不義、不正、利権、墮落、そういうものが海に没してしまうように祈り求める。ですから、イエス様のおっしゃっていることは足許の刷新から始まって、全体の刷新までを求める。それではまだ言葉が足りない。バルトは、「キリストが言われ、為されることは、世の人が革命と言っていることの革命である」と言っていますけれども、今日の箇所は、そういう根本的且つ全体的な改まりを、イエス様はこの箇所で、その行為と言葉で示しておられるのではないのでしょうか。

そういう意味で、私達はこれまでも聖書をそれなりに読んできたのですが、弟子たちは全然イエス様の言っておられることを聞いていなかったと思います。理解していなかったと思うのです。私たちもまたそうではないか。まず神の国と神の義を求める。それをまず自分自身の中に、そして社会全体になることを求める。そういう内容を、イエス様は「はっきり言っておく」とおっしゃったのではないのでしょうか。

お祈りいたします。

神様。

どうか私たちの信仰と祈りがあなたの御心に適うものとなりますようお導きください。この祈り、主の御名をとおし御前にお捧げいたします。アーメン